網走月報

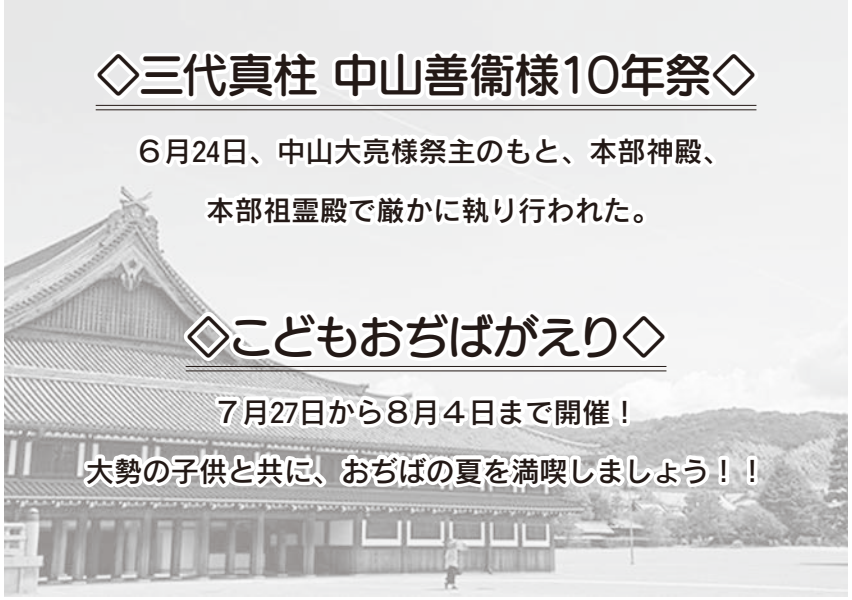
発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

教祖140年祭
三年千日の
活動方針

「教祖のひながたを目標（めどう）に
全教会心定めの達成」

◇三代真柱 中山善衛様10年祭◇

６月24日、中山大亮様祭主のもと、本部神殿、
本部祖霊殿で厳かに執り行われた。



◇こどもおぢばがえり◇

７月27日から８月４日まで開催！
大勢の子供と共に、おぢばの夏を満喫しましょう！！

大教会のHPがご覧になれます！
月報には掲載されない写真もいっぱいです！
ぜひ一度ご覧下さい♪

大教会六月月次祭

大教会６月の月次祭は、12日午前９時30分から新川正人理事祭主のもと、執行された。

新川理事は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「七月二十七日より八月四日まで開催される、こどもおぢばがえりには、一人でも多くの少年会員が帰らせて頂けるようお世話取りをさせて頂き、将来道の子供としてお育て頂けるよう各教会が、おぢばがえり活動の推進として、大教会一丸となり、事を進めさせて頂きます。何卒、順序よく運ばせて頂けますようお導きの程をお願い申し上げます。又、本日祭典後には、少年会本部副委員長、植谷朋彦先生をお迎えして、少年会縦の伝道講習会を開催させて頂きます。ぢばの声を頂戴し、更に少年会活動を活発に進めさせて頂く所存でございます。私共は、ようぼく一斉活動日等、教祖の年祭活動を進めさせて頂く中に、本年も折り返しの月を迎え、お使い頂く喜びを胸に「心さい月日しんじつうけとれば　どんなたすけもみなうけやうで」と仰せ下さる親心に凭れ、にをいがけ、おたすけの上に真実誠の心と行いを積み重ねて頂く所存でございます。」と奏上した。

その後座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められ、参拝者は共に勇んでみかぐらうたを唱和した。

少年会　縦の伝道講習会

植谷朋彦先生

６月12日祭典終了後、引き続き参拝場にて「少年会縦の伝道講習会」が植谷朋彦先生（少年会本部副委員長）を迎え開催された。

植谷先生は子供たちに信仰の喜びを伝えることの大切さを、ご自身のお子様を通して感じられたことなどをお話下された。

◆子供たちに信仰の喜びを伝える◆

縦の伝道とは『子供たちに信仰の喜び』というものを伝えることであります。何も分からない子供たちにしっかりと伝えるためには、教えを伝える側の努力こそが何より大切であると思います。

またさらに、分からないうちから仕込む、躾けるということも大切だと思います。子供は好奇心が旺盛ですから、分からないこと、興味のあることはなんでも聞いてきます。

今から十年前の教祖百三十年祭に向けて諭達がご発布された時のことであります。

家内と相談して、我が家でも子供たちに、何か年祭活動の空気を味わってもらいたいと思い、また、子供たちと共に親の思いに近づけるよう歩ませて頂きたいとの思いで、言葉の意味はほとんど分からないだろうけども、毎日夜寝る前に子供たちと皆で諭達を拝読させて頂こうと決めました。

子供というのはみんなで一緒に何かするということが好

きなのか、楽しいのか、私自身はちゃんと拝読してくれるだろうかと心配しておりましたが、子供たちは喜んで大きな声で競うように拝読してくれました。

いつしか、当時四歳の次男の『諭達第三号』という掛け声で始まるように自然と役割も決まりました。

当時小学三年生の長女と小学一年生の長男は三週間ほどで全て覚えてしまい、暗唱できるようになっておりました。

改めて子供の能力のすごさ、新しいことを記憶する、吸収するという力に驚かされました。と同時に今しっかりと教理をはじめ、教祖から教えて頂きました、おつとめ、鳴物など、陽気ぐらし世界実現のための根本のことも伝えていかなければと思いました。

稿本教祖伝逸話篇の中にもございますように、教祖が女鳴物を直々に教えて下さっておりますが、八歳から十五歳の子供たちに教えて下さっているのであります。

そういうことから思案いたしますと、やはり子供の時から仕込むことの大切さを感じずにはおれません。

ちょっと話を元に戻しますと、子供は好奇心が旺盛で分からないこと、興味のあることはなんでも聞いてきます。

諭達の拝読を毎日させて頂いていると、子供たちはそのうちに分からない言葉を聞いてくるようになりました。「ようぼくってどういう意味？」「ひながたは？」「ふしって？」と。そして、そのたびごとに、なんとか子供に分かるように説明するのですが、これが大変難しいんです。

「ねえねえお父さん。誠真実ってどういう意味」「それはなあ。お父さんお母さんから言われてからするのじゃなく、言われる前にすることやで。神様が喜んで下さることや、誰かが喜んでくれることを、自分から進んですることやで。嫌々するのではなく、喜んですることを誠真実って言うんやで。」と教えると、その日から子供たちは生活の中で誠真実という言葉を使うんです。

自ら玄関の靴を並べながら「誠真実」って叫んでいるんです。あるいはこちらがしてほしいなあと、思っていることを言われる前に動いてくれて「ねえねえ、これ誠真実やろ」って言うんですね。普段から教えを伝えることの大切さというのを実感致しました。

またある時、お風呂に入っている時でした。当時四歳の次男がおもちゃを取ってほしいと言ったんですが、私は三男の体を洗っていたので、「ちょっと待って」と言いました。

すると、次男がいつもと違って素直に「はーい。慎みの心やねえ。」と言うんです。「えらい難しい言葉知ってるなあ」と言うと、「お母さんが教えてくれた。慎みの心はちょっと我慢することって。だからちょっと我慢したらいいねんなあ～」って言うんです。

これも諭達を拝読させて頂いていた時に「慎み」という言葉が分からなくて、うちの家内に聞いたらしいのです。大人は当たり前に理解していることを、子供に分かるように噛み砕いて教えるということが育成者として、親として大切であると思います。

教祖のひながたを考えます時、教祖は我々人間に分かりやすいように、この道の教え、親神様の思召を、お教え下さったのでございます。

何も知らない分かっていない人間に、この道の真実を、尽きせぬ親心を持って説き明かして下さったわけであります。子供の成人に応じて、いろいろと言葉を使い分けてお教え下さったわけであります。

また、おさしづに、

もう道というは、小さい時から心写さにゃならん。そこえ～年取れてからどうもならん。世上へ心写し世上からどう渡りたら、この道付き難い。（M33・11・16）

とございます。

子供が小さい時から、我々大人の日々のさりげない言動や雰囲気、また姿などを通して信仰信念を植え付けていくことが大切であり、年を取って世間に心を移してしまってからでは、なかなか道が付き難いと仰せられています。

何でも吸収しやすい小さい時から、信仰の喜びを、しっかり映す努力をしなければならないと思います。

さて、本年の少年会の年頭幹部会で真柱様は、「教祖は、親神様の思召のもと、陽気ぐらしの道しるべを示して私たちをお導き下さるのですから、道を歩む者にとって、これ程心強いことはないのであります。」と、このように教祖のひながたこそが、道を歩む者にとって、心強い手本である旨のお言葉を下さいました。

また、おさしづに、

ひながたの道を通らねば、ひながた要らん。ひながたなおせばどうもなろうまい。（M22・11・7）

とございます。

ひながたこそ我々信仰者の求める道なのであります。教祖が御自ら通られた、ひながたの道こそ、我々は、辿れば辿るほど、深い深い親心を味わわさせて頂けるでしょうし、その先には何よりも代え難い喜びがあるのだと思います。

縦の伝道を考えます時、何よりも我々大人が日々、親神様のご守護を感じ、その喜ぶ姿を子供たちに映し、そうすることによって知らず知らずのうちに子供たちの心に信仰の素晴らしさが伝わっていくのだと思います。

ですから、私たちは、いかなる中をも喜び勇んで通られた教祖のひながたを求め、さらにはまた、先人の方々の苦労、努力を尋ねることも大切であると思います。

先人の方々は命かけてもの思いで、この道を歩んで下さったのです、我々に信仰をつないで下さったのです。

◆代を重ねることの難しさ◆

最近良く耳にしますのが、代を重ねて信仰することの難しさ、信仰をつなぐことの難しさであります。

おさしづに、

一代は一代の理、二代は二代の理、代々続く末代の理である。（M29・1・29）

また、

さあさあ続いてあってこそ、道という。続かん事は道とは言わん。言えようまい。（M39・5・21）

とございます。

この教えは生涯末代のものであり、世代を重ねることによって、その理が深くなり、続いてこそ道なのだとお教え頂きます。

私は人の親とならせて頂いて、改めて親のありがたさというものが、分かるようになりました。我が親が、どれだけ苦労して我々子供たちに、この道をつないで下さったか、今さらながらいろいろと、迷惑かけてきたことに申し訳なかったなあという気持ちと、ありがたかったなあという感謝の気持ちでいっぱいになります。

そう思うと今度は、我々がしっかり子供たちに信仰をつないでいかなければという気持ちになります。

私自身の子供の頃の事を振り返って、思い出しますと、経済的にはとても恵まれた暮らしではなかったと思います。本当に質素な生活、慎ましい暮らしであったと思います。もっといい暮らしをしようと思えば、できたのでありますが、私の親はそうはさせなかったのです。

おそらく切り詰めて切り詰めて生活をし、教会へ本部へとお尽くしをしていたのだと思います。それは子供の事を思って、信仰を伝えるために、お道の教え通りに通って下さったのだと思います。

そのおかげで今があるのだと思えば、ありがたかったなあとしみじみと思わせて頂きます。

当時のエピソードですが、奈良公園のすぐ近くの自然豊かなところで、我々兄弟４人は育ちました。鹿と共に育ったようなものであります。

空腹を満たすためによく、あけびやざくろ、木の実なども食べたりしてました。お菓子などを買ってもらったことなど、ほとんどありませんでしたから、食べ盛りの我々子供たちが、一番お世話になったのが、パンの耳であります。

当時は二十円くらいで一袋どっさりと買えました。パン屋にお使いに行くと、顔なじみになったお店の人が、「僕たち、いつもお使いえらいねえ。おうちに犬飼ってるの？」と聞いてこられたんです。

私は子供心に、自分たちが食べるんやということも言えずにいたら、兄が「うん。家に４匹犬いるねん。」と答えたんです。いまだに、昔話になると当時を懐かしんで、笑っております。

こうして子供の頃のことを思い出すと食べる物も着る物も生活の全てが質素であったと思います。しかし、やんちゃな兄弟でありましたので、賑やかで楽しかったですし、ささやかなことが大きな喜びであったなあと思います。

また、父はにをいがけにもよく連れていってくれました。兄弟で競うようにパンフレットを配りました。時には、訪問先でお菓子を頂いたこともありました。

時には、他宗教の方に怒鳴られ、水を掛けられるということもありました。おそらく父は我々子供達にも、徳を積ませてあげねばという思いであったと思います。

おさしづに、

さあさあ小人小人は十五才までは親の心通りの守護と聞かし、十五才以上は皆めんめんの心通りや（M21・8・30）

とお聞かせ頂いております。

これは子供に見せられることは親の心通りの守護である、ということであります。しかし、だからと言って、親だけがこの道をしっかり通っておればいいのかと申しますと、違うと思います。

子供を放って置くのではなく、子供にもしっかりと手間暇掛けて、親が導いていかなければならないと思います。

子供にもひのきしんやにをいがけを通して、徳を積ませてあげることも大切であると思います。

以前、真柱様は、

「代を重ねるにつれて、その徳を頂いて信仰の喜びを受け継ぎ、自らも真剣に歩む中に、日々新たな御守護の感激に浸り、初代や二代では味わうことのできなかった、更に大きな喜びを味わい、先代の人々が到達できなかった成人の姿へと進ませてもらうのが、後に続く者の使命であると申せましょう。」

と述べられた上で、

「しかしながら、一代より二代、二代より三代と理が深くなり、末代の理になるのだと教えられていますが、現実はどうだろうか。

信仰が代を重ねていくうちに、そのお言葉とは反対に結構さに慣れ、それが当たり前となり、ありがたみが心から薄らいでいってはいないだろうか。〈中略〉

せっかく先輩たちが伏せ込んでくれた理までも失ってし

まうことになってはいないかと、反省する必要があるのではないかと思うのであります。」

と厳しくお仕込み頂きました。

そして、信仰の元一日を親から子へ、子から孫へ、次代を担う者たちへ、しっかりと伝えて頂きたい旨のお話をして下さいました。

家の信仰の元一日を知るということは、ものすごく大事だと思います。何故大事かといえば、それはまず自分のいんねんを知るということだからです。いんねんを知るということは大事であります。何のためのご恩奉じか。何のための信仰か。ということであります。

子供たちに、子供のうちから、しっかりと家の元一日を伝えて頂き、子供たちに折々に家の信仰の元一日、また、お父さんお母さんのご守護頂いた話を聞かせてあげて頂きたいと思います。

◆活動方針を通して◆

少年会では、活動の方向性、全体的な動きとして活動方針と重点項目を決めております。本年の活動方針は、昨年に続き、『教祖のひながたを目標（めどう）に教えを実践し、子供に信仰のありがたさを伝えよう』であります。

この活動方針は、年祭活動における私たちの心の指針として、真柱様からお出し頂いた「諭達第四号」の精神にのっとって、私たち育成会員がしっかりと、教祖のひながたを目標に教えの実践に励み、そして、現われる結構な姿や喜びを通して、子供に信仰のありがたさを伝えていきたいとの思いからであります。

さらに重点項目でありますが、本年は、「子供に教祖のお話をしよう」「教会おとまり会、教会こども会を実施しよう」「地域で少年会ひのきしんを実施しよう」であります。

この三つの重点項目を柱に、更に縦の伝道を推進していくことができるように共々に成人をさせて頂き、たくさんの子供たちに、子供の時に、ぜひとも天理教の教会の温かい雰囲気を味わってもらいたいし、おぢばのにをいを感じてもらいたいのです。

そして何より子供たちに接する我々育成者である大人がお道のにをいをかけていかなければならないなあと思います。

重点項目にも、『教会おとまり会、教会こども会を実施しよう』とありますように、また、夏の『こどもおぢばがえり』にも積極的にお声がけを頂き、こういった行事を通して、子供たちの心の中に自然と信仰心を育んで頂きたいと思います。

さて、夏の行事についてでありますが、立教百八十三年のコロナ禍より『こどもおぢばがえり』は、三年連続の中止となりました。

子供たちのことを思います時、非常に残念であり、なんとも言えない気持ちになりましたが、昨年、従来よりは少し行事の規模は小さくなりましたが、４年振りに再開させて頂きました。

本年は七月二十七日～八月四日までの九日間、『子供とおぢばがえりの喜びを味わおう』『全教会からの帰参を目指そう』と掲げて、さらに喜び一杯の『こどもおぢばがえり』になるよう共々に努めさせて頂きたいと思います。

以前、真柱様は、

「親神様は、人間が道を通る上に困らないように、それが年端もいかぬ子供であっても、前以てその人に相応しい道を相応しい旬に示されて、私たちをお育てくださるのであります。このことを頭から離さずに、道の子を一人残らずよふぼくに育て上げるという気構えを持って、子供たちに接してもらいたいと思うのであります。」

と仰せ下さいました。

私たちの少年会活動というのは、子供たちを立派なようぼくに育てるための尊い活動であります。

また、本年の『こどもおぢばがえり』におきましても、「子供の丹精」ということをしっかり念頭において、許す限り、昨年よりも多くの子供たちを、〝おぢば〟にお連れ帰り頂きますよう、尚一層のお力添え、ご丹精の程よろしくお願い申し上げます。

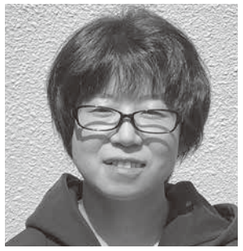
ただ今の時旬は、教祖百四十年祭に向かっての年祭活動二年目であります。教会内容の充実には、子供たちの育成に関わる活動が欠かせません。未来のようぼく、教祖の道具衆として、たすけ一条の御用を将来率先して担わせて頂く人材を育てさせて頂くことが、今の我々の大きな使命であると思います。

そして、『子供たちに信仰の喜びを伝える』ためには、最終的に一番大切なことは我々大人、親、あるいは育成者がどれだけ親神様、教祖の思召に適った通り方、生き方をしているかに尽きると思います。

子育てをすることで、また子供の育成に関わることで、あれやこれやと思案させて頂く中で我々大人の方がむしろ成人させて頂けるのだとも思案させて頂きます。

最後になりましたが、どうかこれからも縦の伝道の上に子供たちの育成の上に、皆様方のご丹精をお願いさせて頂きまして、本日の縦の伝道講習会を終わらせて頂きたいと思います。

教人資格講習会を受講して



網新分教会
椎木敦子

このたび、会長さんより勧められ、今年30歳になった節目と教祖年祭活動中におぢばへ帰らせて頂きたいと心定めをさせて頂いていたので、良い機会だと思い、教人資格講習会を受講させてもらいました。

大教会で第1回目のひながたセミナーを受けてからおぢばに帰り、教える人と書いて教人になるというプレッシャーの中、不安と自信を失くしていましたが、講習の自己紹介でこのことを話すと、私も同じだから大丈夫と数人に声を掛けられたり、北海道から来ている方が意外といたり、長い間一緒にいたかのように毎日笑いが絶えず学生に戻ったような楽しい15日間でした。

おぢばでの過ぎる時間は早いから心定めをして通るようにと会長さんより伝えられ、毎日おさづけを取り次がせて頂く心定めをし、最終日までクラスの方や教祖殿で修養科生におさづけを取り次ぐことが出来ました。

偏頭痛持ちで、普段は辛いこともあるのですが、偏頭痛が出ることも無く、おさづけを取り次がれる側ではなく、取り次がせて頂く側で有り難いと思わせてもらいました。

おぢばへ行く前までは腹立ちの心を遣うことが多かったのですが、十全の守護と八つのほこりを講習で真剣に覚えたことで、網走に戻って来てからは意識して生活するようになりました。

すべて親神様のお計らいであることに感謝し、教祖の年祭まで残り半分を勇んで通らせて頂きます。

教祖140年祭

修養科事前研修会 網走よろこびセミナーを受講して

誠網　菅原理恵子

初めての受講でしたが、どの講義も新鮮で天理教の教えの基礎を学ばせて頂き、とても勉強になりました。

普段の朝夕のおつとめの意味合いも深いことを知り、これからの心構えの参考になりました。

誠網　富川ゆかり

神様が本当にいること、心でつながっていること、人間の目的はたすけ合って楽しむこと、自分の身体は神様からのかりもので、その恩返しをひのきしんでさせて頂くことなど、心に納まりました。

旭網　栗林　直美

受講させて頂いてとても良かったと思います。私自身、もっとこの学んだことを活かし、今後、信者さんに受講して頂けるように勧めたいと思いました。

今回は、付き添いということでしたが、お陰様で喜んで頂けたかどうかわかりませんが、お顔が元気になり、喜んでこの先、つとめて頂けたらと思います。

東網　石山　康子

受講する前と後では、自分の意識はかなり変わったと思います。前は、私は、何のために生きているんだろう、早く亡くなった夫と娘の側に行きたい、夫も娘も命をとられるほどのことはしてないのに、なぜ？と思ってばかりいました。

それがこの三日間でかなり変わりました。なんとか前を向いて行けそうです。修養科の三ヶ月で、もっと前向きになりたいし、人の役に立ちたいと思えるようになって帰ってきたと思います。

誠網　馬道奈緒子

二回目の受講になりますが、初めて聞くようなお話に、新鮮さを初日から感じていました。

「八つのほこり、いんねん、たんのう」の授業で、自分の癖を自覚すること、認めること、そこから喜ぶ心に切り替えていく。気付いたら「さんげ」。神様ごめんなさい、という心に切り替わっていく。

今世、たくさんほこりを積んで来ているんだな、そのためにおたすけのご縁を頂いて、天理の道へ導いて下さったんだなと、改めて感謝します。

誠網　田村　尚美

修養科、教人講習を受講してから、時々おぢばには帰らせて頂いていましたが、お話に触れてはいませんでした。

朝夕のおつとめを自宅でさせて頂きながら、ほこりを払い、毎日一人はおさづけをさせて頂くことを目標にしてまいります。

また、大教会に来させてもらいたいと思いました。

札幌に戻って、この二泊三日の研修会に来て良かったことを話していきます。

動静

年祭

▼直轄所属・武田弘樹の霊様の五十日祭、合祀祭が6月4日、東京都葛飾区の自宅にて瀬川陽一・直轄世話人祭主のもと執行された。

▼直轄所属・木田貞雄の霊様の1年祭が6月15日、斜里町の自宅にて大教会長夫人祭主のもと執行された。

▼網栄（上斜里）分教会四代会長・田中勝市の霊様の30年祭、五代会長・田中照枝の霊様の10年祭が6月24日、天理市のおぢば工房たなかにて細木善信・大教会役員祭主のもと執行された。

6月人のご守護

○初席者（1名）
誠綱　倉田悠丞

○中席者（1名）
直轄　浅田幸人

○修養科修了者（1名）
直轄　大重久恵

○教人資格講習会修了者（1名）
網新　椎木敦子

育英会寄付者

菅原明宏様（初代会長10年祭、三男誕生）

大教会6月の動き

2日　ようぼく一斉活動日（網走支部会場）。みそか会。役員会会議
3日　役員会会議
8日　お話し会
9日　網走支部例会会場。縦の伝道日
10日　役員会会議
11日　教祖140年祭網走おたすけ委員会会議。育成部部会
12日　月次祭。縦の伝道講習会。役員会会議。連絡会
13日　教会長夫妻練り合い。修養科事前研修会網走よろこびセミナー（15日まで）
16日　縦の伝道日
23日　縦の伝道日。詰所23会
24日　会長、三代真柱様10年祭参拝、本部神殿奉仕つとめる
26日　本部月次祭遙拝。会長、教区主事会出席。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる
27日　会長、かなめ会出席、一期講師修了式。藤山重善役員、本部神殿奉仕つとめる
28日　会長、札幌方面直轄信者まわり（30日まで）
29日　大教会一斉活動日
30日　縦の伝道日

立教187年 人のご守護 心定め

初席者	ようぼく	修養科修了者	教人
60名	29名	18名	11名
成果（6月末現在）			
8名	5名	4名	0名

立教187（令和6）年人のご守護成果表（6月末現在）

教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	帰参者 当月	帰参者 累計	教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	帰参者 当月	帰参者 累計
直轄		3		1		5	52	誠央						1	21
美幌							3	常道							1
女満別			2	2		6	34	徳道		1				2	17
斜里町							0	満金							0
釧厚							3	網安							1
武士							2	オホーツク	2					9	59
常呂		1				1	21	網徳			1				3
旭網						2	7	栗沢							6
御料							1	徳元	1	2					8
東藻琴							1	網盛						1	3
陽光							7	網新			1				5
呼人						1	6	網葉							1
誠陽		1				1	9	網陽							2
網栄							2	誠網	4	5	1			6	62
實東	1	1				1	26	網次						2	14
東網				1			1	網昇						4	10
宗稚						1	12	勇走						1	7
								詰所						3	15

初席 当月	初席 成果	中席 当月	中席 成果	ようぼく 当月	ようぼく 成果	修卒 当月	修卒 成果	教人 当月	教人 成果	帰参者 当月	帰参者 成果
1	8	1	14		5	1	4			47	422

6月　月次祭　6/12㈬

〈参拝者数　約80人〉

神殿講話	賛者	指図方	扈者	祭主		
	遠田三清奥 藤中澤宮野 浩　春秀直 二繁雄明治	丸山 一 徳	小大 松山 篤雅 志人	新川 正人	祭員	祭典役割
胡三 味琴 弓線	小すちゃ太拍 り　子ん笛 が　ぽ 鼓ね鼓木ん	地 方	てをどり			
丸山藤 山﨑井 のり蔦道 子代惠	栗三三澤藤大 林幣幣田山山 徳敦正忠重雅 正志志和善人	小瀬細 松川木 篤定善 志自信	三栗大結丸新 幣林教城山川 リ長 輝ツ夫和一正 子子人広徳人	座りづとめ		
結細澤 城木田 美 和朱裕 子美子	岩小遠青在菅 原針田山原原 敏眞正道明 繁文明博彌宏	田結三 中城幣 和敦 繁広志	三斎村永清遠 澤藤井井水藤 由 美知さと康信明 子子み幸喜広	前半		
眞三瀬 壁幣川 美 香代祐 織子子	奥増瀬三清眞 野田川澤水壁 直裕定春知正 治一自雄幸教	三安藤 幣田井 正光広 志広志	三栗藤遠新清 幣林山藤川宮 有直真浩正秀 子美理二美明	後半		

網走月報 別刊

令和六年七月号

教会長夫妻ねりあい感話

テーマ 「おやさま」

斜里町分教会長　奥野　直治

これまで自分自身で教祖を感じたことを素直にお話したいと思います。少しの間、お付き合いのほど、よろしくお願い致します。

教祖140年祭まであと20ヵ月程となり、年祭活動の真っただ中ではありますが、自分自身で意識しているのは、やはり真柱様よりご発布された「諭達第四号」であります。明治20年に現身をお隠しになられてから137年経った今も尚、「変わることなく教祖は存命のまま、世界たすけの先頭に立ち、いつも私たちをお導きくだされております。」そして私自身も信仰者・ようぼくとして、教祖の道具衆の一人であり、この年祭に仕切って、おたすけに励むべき旬である。と日々感じております。

さて、今私は年祭活動の中、この「諭達」を意識していると柄にも無いことを述べましたが、そもそも、振り返ってみますと、この私自身まさか自分が「一信仰者」、「一ようぼく」として信仰を歩むとは思いもよりませんでした。

ご承知の通り、私は網走大教会で生まれ、教会に繋がる皆さんに育てて頂きました。当時の大教会の住み込み人はざっと記憶を思い返すだけでも、約50名程は居たと思います。それに付け加え、教会へ来られる信者さん、部内教会の皆さんも大勢おられ、毎日がとても賑やかで、そしてとてもスリリングでありました。そんな日常でも今思い返すと、大勢でワイワイしながらも、いい意味で気を使わない「大きな家族のような愛。」また、「信仰の温かさ」の中で、幼少期の頃より、自分自身の信仰も育まれ始めていたように思います。

私がちょうど10歳の頃、教祖100年祭の年に40キロ離れた斜里町へ引っ越しました。結論から言いますと、毎日がはちゃめちゃでした。学校でも家庭でも居場所の無い当時の私の心はとても傷付き、疲れ、荒れておりました。

毎日、陽が沈み、夜になると毎晩2時間以上正座で説教をされ、「お酒の瓶」や「ガラスの灰皿」が飛び交うような状況が日常だったので、無意識のうちに夜になるのが怖くてたまらず、幼い自分にはどうする事も出来ない苦痛な毎日でありました。そんな毎日が数年間続き、やがて子供の私は自分一人では耐え切れず、叫ぶようにして助けを求めました。当時、教会にあった黒電話を両手で力いっぱい握りしめ、泣きながら電話をかけた先は網走大教会にいる当時の大教会長様でした。まず電話が繋がったのは、昌子奥さん。事の流れを伝えたと思うのでありますが、当時、何をどう説明したかは覚えておりません。ただただ言葉よりも気持ちをぶつけたのだと思います。そして、「大教会に戻りたいです！」と叫ぶように言ったことだけは覚えております。電話を切った後、同じ町内にある知床分教会の半沢元章さんがすぐに自分の所まで迎えに来て下さり、車で大教会まで連れて行って頂きました。大教会に着くとまず、昌子奥さんに自分の話を黙って聞いてもらいました。そして4号室で待つように言われ、4号室で一人座っていると、しばらくすると大教会長様が来られ、「直治、どうしたんだ？」と優しく声をかけて頂きました。そこから何かを必死に訴えたのだと思います。当時の事なので詳しく覚えておりませんが、鮮明に覚えていることがあります。それは、子供の自分が力の限り、気持ちを振り絞るようにして大教会長様にぶつけた言葉、「斜里町分教会が嫌いです」「もう嫌です」「大教会に帰りたいです」という言葉でした。それに対して当時の大教会長様のお言葉は「直治、斜里町分教会が嫌じゃなく、今の環境が嫌なんだよ。斜里町分教会とは別だからな。」続いて、「今日は

いいけど、次からは来る前に連絡しておいで。急に来ても居ない時もあるし、いきなり来たらだめだよ、ちゃんと連絡しておいで。」と、温かみのあるお言葉を頂き、当時無意識ながらも自分には帰るところがある。と再確認して、また斜里へ戻ったのでありました。

それから数年経ち、こんな事もありました。ちょうど斜里の高校に通っていた頃です。その頃、既に自分の中で家族というものは崩壊しておりましたので、教会に帰っても誰かと会話することもなく、思春期もあり、朝から晩までイライラしておりました。当然、笑うこともないので、笑い方すら忘れていた時期に、私の置かれた家庭環境では、普段から「お金がない。」と言う割には、いつも夜になるとお酒の力を借りて暴れたり、モノが壊れる音が相変わらず毎晩聞こえておりました。私は当然どんな音が聞こえても、何が起こっても無視をして関わらないようにしておりました。そんなある日突然、私の部屋の扉を勢いよく開けられると、そこには黒い教服を着て、片手には灯油の入ったポリタンク。もう片方の手にはライターを持った男が立っておりました。「お前を殺して、おれも会長を辞める！」物凄い勢いで怒鳴っておりましたが、感情の無い私は背中を向けながら、「あ、行くとこまで行ったな。おれもここで死ぬんだ」と冷静に感じておりました。その態度に更に怒り狂った様子で、ついには灯油を私の頭から全身にかけ、いよいよライターで火をつけられる寸前までいきました。私は「そうか、こうやって死んでいくのか…」と感情の無いまま事の流れを受け止めていた時、ふと頭をよぎった光景がありました。その光景とは、高校受験を控えた中学３年の頃、教会の中でたまたま廊下を通った時に聞こえてきた声で、当時なにかしらの御用でうちに来ていたであろう、今の網昇の会長さんの声でした。「今の時代、直治を高校くらい出さないとダメだ」「高校に行かせないと！」と大きな声で私の為に、進路について説得してくれているのが分かりました。それを思い出した途端、次の瞬間には気が付いたら私は両手を床につき、目の前の男に、土下座をしていました。何の涙かはわかりませんが、目の前の床が見えなくなる程、大粒の涙を流しながら「高校だけは行かせて下さい。卒業させて下さい」と叫ぶようにお願いをしている自分がいました。心の中で私は、「俺は脅迫に屈して頭下げるんじゃない。こいつを絶対認めない。俺は今、高校に行ってるんではなく、人のお陰で行かせてもらってるんだ。だから俺に出来ることは卒業することだ。どんなことがあっても卒業だけはする。」そう自分に誓いました。その後、無事高校を卒業しておぢばの学校、本部での勤務、青年づとめをさせて頂きながら、その都度色々とありながらも元気な今に至ります。

さて、そんなこんなもありながら、教会長として初めて迎える年祭に向け、年祭活動の真っただ中の今、改めて「教祖」を自分の中で振り返った時、今の私があるのは親神様のご守護は申すまでもなく、親神様の御教えをお伝え下され、御自らひながたの道を通られた教祖。そして、その御教え通りに、今も変わる事なくひながたを辿っておられる先輩、先人の皆さんのお陰であると改めて感じました。私が幼少期の頃より今、ここに至るまで、自分自身ではどうしようもない時やしんどい時、辛い時など、その時々には回りでたすけてくださる先人、先輩の「ようぼく」のみなさんが居られました。そして、先人、先輩一人ひとりのその背中には、いつも「教祖」が確かにおられ、教祖はいつ、どんな時も世界たすけの先頭に立ってお働き下されるが如く私をもお導き下されました。人にはそれぞれの道があり、それぞれ起こりうる身上、事情などの事柄も違います。しかし、「御教え」とその実践である「ひながた」には変わりや違いはない。と、私は思います。年祭活動のこの旬に、私自身も教祖の道具衆の一人として、ひながたを辿る努力をしつつ、おたすけに励む中、教祖を身近に感じながら、今度は私が一つでも、また一人でも多くおたすけさせて頂きたいと思います。取り留めのない話になりましたが、この辺で終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。